

〈2012年度 第3回定例研究会〉

発達の見点からみた現代の子ども達

講演：田中 恭子（益城病院 子ども心療室 医師）

日時：2012年11月17日（土）

第3回研究会には、250名を超える参加者があり、関心の高さがうかがえる。また、ご講演内容もわかりやすく、質問も相次いだ。以下、その主な内容について報告する。

○第一部：現代の子どもの発達の課題

・どんな子どもも「発達」している存在～発達の三つの視点

発達は、生理的・心理的・社会的な三つの側面で構成され、遺伝要因と環境要因の影響を受けている。生理的・身体的発達では、脳の急激な発達に対して、生殖系は緩やかなど一つの側面のなかにも多様性がある。また、現代の子どもは、体格は大きくなったが、運動能力は低下している。背景の一つに、遊ぶ場所の減少、子どもとの遊び方がわからない親の存在がある。心理・精神的発達では、およそ標準的な発達（マイルストーン）を理解しておく必要がある。そのために専門家は、直接観察し、情報を得て、心理検査を行うことが求められる。社会的発達では、社会の一員として、社会に適応するための力を身につけていく過程が大切である。

次に、最近の診察で感じるということ興味深い報告があった。それは、環境要因の影響を示唆するものだった。一つは、精神科を受診する子どもの増加。もう一つは、虐待や発達障害のケースの多さである。なお、複雑なケースには、家族内にキーパーソンが不在か、家族員も問題を抱えている場合がある。子どもたちは、少子化による対人交流機会の減少、高学歴化、核家族化による親の負担増、そしてネット社会の浸透による生の人間との関係の希薄化に直面している。

田中氏は、現代の子ども達の傾向として、対人関係を苦手とし、感情・衝動のコントロールが未熟、経験的発達の偏りによる表現力・理解力の偏り、そして敏感と鈍感の存在を挙げた。

○第二部：発達に課題のある子ども達

・「発達」は万人に関係がある～特性を理解することの大切さ

全ての人には、発達して成人する。「発達」という視点は、人と関わるうえでも役立つもので、現代の社会問題の多くも発達障害と関係している。「発達」に障害があるとは、発達の過程で獲得さ

れた様々な能力において、偏り・アンバランスさがあり、生活に支障を来していることをさす。それは脳の機能障害に由来し、発達期に特徴が現れ、生来性のもので生涯続く特徴を有する。

しかし、発達自体が悪いわけではないという。それは、情報や物事の感じ方や行動パターンが多くの人たちと違ってユニークで、世の中では少数派のため「生きづらさ」を抱えている。よって、「通訳」になったつもりで、その人らしさを尊重し、共に違いを認めながら、共に支え合うことが大切とのこと。

また、自閉症スペクトラム（社会性の困難、コミュニケーション困難、想像力・こだわりの困難）や注意欠陥／多動性障害 [ADHD]（不注意、多動性、衝動性）を例に、困難さの説明がなされた。これらの発達障害は、幾つか重なりあっている場合もあり、複雑化している。

・子どもが成長する環境を整えること

子どもの成長する環境を整えるために、まずは、発達を構成する生理的・心理的・社会的な三つの側面からアセスメントし、取り組みやすさ、得意・不得意の把握、時間はかかっても本人にとってわかりやすい、安心できる環境が大切である。それは、家庭・医療機関・行政・福祉機関・そして教育機関の互いの連携によって実現できる。特に、家庭との連携では、①障害のある人と暮らすことの大変さ、②わが子に障害があることを受けとめることの大変さを理解し、親への支援が欠かせない。また、家族自身も同じ特性を持つ場合も考えられる。よって、家族についても、生理的・心理的・社会的な三つの側面からアセスメントし、強みを使ってアプローチし、できることを提案することが援助において重要とのこと。

◇今後の課題と展望

発達障害の特性を持つ人の増加に対して、診療可能な医療機関は少なく、医療者の知識や経験も不足している。さらに、発達障害をもつ成人への対応も課題という。

一方、子どもは本来、成長する力を備えている。よって、遺伝子を変えられないが、環境は変えられる。特に、本人に最も影響を与える「人」という環境が、本人にあった環境になることができれば、本人は成長する。つまり、子どもを理解し、寄り添う人の存在は大きい。

おわりに

最後に、田中先生をご紹介いただいたウェルビーイング研究会メンバーに感謝申し上げます。ウェルビーイング研究会は、熊本学園大学の卒業生で構成され、年一回、研究会を共同で企画している。

(研究会報告担当者：黒木 邦弘)